

血管機能検査の現状と今後への期待

富山博史

東京医科大学 循環器内科

従来、血管機能障害評価の目的は、“評価(検査実施)時点”における血管障害重症度の判別であった。しかし、近年、血管機能障害自体が心血管疾患発症・増悪の因子(心血管系リスク)となることが注目され、血管機能障害評価検査は予後予測(増悪因子)指標として重要となってきた。こうした背景から、2014年2月に日本循環器病学会より血管機能検査のガイドラインが発表された。一方、頸動脈超音波検査による形態評価(IMT肥厚、プラーク)は血管障害重要度評価に頻用される検査方法である。しかし、これら血管障害重症度の形態的評価方法は治療効果を評価するには限界が示唆されおり、治療効果を評価する上での血管機能指標の有用性も注目されている。

本講演では、血管機能検査方法(脈波速度、脈波解析・中心血圧、内皮機能検査、Tonometry内皮機能検査、下肢上腕血圧比、一点式脈波解析)の特徴、検査実施の注意事項、検査の限界を中心に解説する。さらに血管機能検査の今後の方向性についても私見を述べたい。

第1回日本血管血流学会学術集会